

『雑兵物語』に用いられるベイの特徴

橋 本 礼 子

一. はじめに

関東地方以北に主に分布している方言モダリティ形式のベイは、地域によって承接のあり方、担う用法には差があるが、主として推量系の表現（推量・確認要求）や意志系の表現（意志・勧誘）の意味領域のものと言つてよい。これら方言のベイ形式は古典語のベシ（ベキ）に由来すると言われる。しかし、古典語のベシがもつ認識の意味（必然、推量）は保持しているのだが、事態的意味（状況、可能）や義務的意味（義務、適当）は、ベイ類を認識の意味で用いている方言には全く見られない¹⁾。上代や中古の用例を見ると、ベシはム、メリなどのモダリティ形式や否定形式、テンス・アスペクト形式、連体ナリなどが後接しうること、仮定節に生起すること、またナムの結びになることなどから、ム、ラム、ケムなどのム系のモダリティ形式とはかなり性格が異なっているといえる。つまりベシは、上代・中古にはいわゆる真正モダ

リティの枠に入らない形式であつたのに、時空間を隔てた現代の関東以北の方言においては西日本方言のム系のモダリティ形式に相当するものになつてゐるのである。

では、関東地方以北に分布している方言モダリティ形式のベイと古典語のベシ（ベキ）とのつながりは、どのように確認することができるか。古典として記録された資料が地域的にも階層的にも直接の比較対象として適さないだけでなく、近世以前の関東地方以北の方言資料の中でモダリティを分析するに足るものが少ないため、この作業は容易ではない。江戸中期の『仙台浜藪』などの辞書類に記録されていることもあるが、多くは「さうたんべいと詞のとまりにへいといふ事をつくる也」（『仙台浜藪』）のように文末にベイという形式を使うことを短く説明するに止まり、用例が豊富とはいえない。また洒落本や滑稽本などをみると、東国の在郷武士や田舎出の下男、勇み者などの台詞として、つまり田舎者や任侠者などの役割語としてベイが頻繁に用いられており、

既に東国出身者はベイを使用するということが常識となっているだけでなく、このことをステレオタイプとして利用する状況になっていることが見て取れる。つまり、近世には既に、ベイが中央（江戸・上方）文献において位相的な差異と地域的な差異を持つ形式として登場しているのである。

もちろん、モダリティ体系全体に生じた変化もある。上代・中古のモダリティ形式全般について共通する特徴を述べると、第一に事態が実現したものか未実現のものかを識別し、文法形式で区別して表現する時制的分担体制下にあったこと、第二にすべての形式が連体用法をもっていたことが注目される（山口一九九二）。このことは、上代・中古において真正モダリティだけを専一に担う形式がなかったことと、対象の意味と作用の意味が連続した複合的な意味を一形式が持っていたことを意味する現象であり、こうした上代・中古のモダリティ体系が時代を経て現在のようない形式の一つのモダリティの意味が対応する体系に変化する中で、ベシの位置づけも変わっていったといえる。ただし、これらはベシに限らずムやラムなどにも関係することなので、なぜ東国でベシが真正モダリティ形式として広まっているのかを説明する理由にはならない。

そこで、中世までの資料と近世以降の方言資料との中間に位置づけられるものとして、江戸初期成立の関東以北の方言資料と考えられている『雑兵物語』のベイの用例を検討し、ベシ（ベキ）から現代方言のベイへの変化の途中段階を明らかにする一助とし

たい。

二 『雑兵物語』という資料の性格

『雑兵物語』を方言資料として用いる場合、成立時期、著者およびその属性、執筆目的、登場人物の設定などが問題になる。『雑兵物語』の成立年代は不明だが、中村（一九四三）は、本文中に明暦三年の江戸本郷丸山本妙寺から出火した通称振袖火事についての記述があること、また島原の乱の経験者も老衰した等として実戦の経験を父や曾祖父のことばとして表現していること、さらに松平信興の臣下である田代定右衛門忠金の『陪従私記』の天和三年の項に雑兵物語が記されていることから、早くても明暦三年（一六五七）以降天和三年以前の成立、むしろ島原の乱から二〇年程の明暦三年よりさらに下った天和に近い頃の成立と推測している。また著者は、高崎城主松平信興ともその父輝綱とも言われており、作品中に用いられている言語の特徴から、深井（一九七三、五七二頁）は関東地域の農村に基盤をおくものと推察しているが、作者が東国出身者という確証はない。寛文末から延宝にかけて奴言葉や六方言言葉による作品が生み出されていたことを含めると、近世後期の滑稽本・洒落本などのように地域方言をおかしみの素材として克明に写し取るという態度ではなく、中村（前掲）のいうように、軍学の隆盛に伴った軍学書の一般化の流れと当時流行した奴言葉・六方言文学の手法の影響とが合わさって生み出されたものと見るのが妥当だと考えられる。つまり、現実

の方言が記録されたものというより、登場人物を造形し読み手の属性に近づけるためにベイが利用され、あるいは流行の手法としてベイが採用されたと見るべきである。

このように作品の書誌的な面については不確定要素が多いのだが、概して「作品」というものは、この人物ならこう話すであろうという想定のもとに描かれたものであることが前提となる点で、『雑兵物語』の言葉にも著者や写し手が当時なんらかの言語事実から得て形成した言語イメージが反映しているはずであり、注意は必要だが言語資料としての価値はあると判断した。さまざまな不確定要素があるにしても、『雑兵物語』は近世初期の口語的資料としてはベイ・ベシ類の用例数が二九一例と量的にまとまったものである点、また近世中期以降の滑稽本・洒落本などでおかしの対象として誇張して用いられているベイとは質的に異なっている点で、他の作品よりも用例の利用価値・信憑性が高い。このため、日常語として使用されているベイを参考にして著された作品というスタンスで、現代方言との対照のために『雑兵物語』のベイの特徴を記述していくことにする。

なお、本稿では内閣文庫蔵浅草文庫旧蔵本を底本としている岩波文庫版(中村・湯沢一九四三)を用い、必要に応じて弘化三(一八四六)年版本を底本とした深井(一九七三)も参照した。³⁾

三、『雑兵物語』のベイの分析

この資料で用いられている推量・意志表現を担う形式は、ベイ

二八四例、ベシ七例、ウ六例、マイ三二例である。以下、本稿に挙げる用例はテキストとして使用した岩波文庫版の表記にならうが、一部漢字を常用漢字に改めた。また、「」には岩波文庫の頁を、〈〉には文脈についての補助情報や省略箇所などを記す。

三・一、『雑兵物語』のベイ以外の推量・意志表現形式

『雑兵物語』には、主としてベイが用いられているが、ベシやウも散見される。

ベシは七例使われており、金田(一九七九、一九七二)にも述べられているように、文語形式と口語ベイとの置き換えがあったことも考慮すべきである。だが、このベシ七例(未然形ベカラ(ズ)三例、終止形ベシ四例)は上巻の初めに登場する二人の小頭、すなわち「鉄炮足軽小頭 朝日出右衛門」「弓足軽小頭 大川深右衛門」だけに使われており、他の登場人物には用いられていないので、話し手の位相を反映させたものとも考えられる。

またウは六例あるが、このうち四例は上巻初めの「鉄炮足軽小頭 朝日出右衛門」(二例)、「弓足軽小頭 大川深右衛門」(二例)であり、位相の反映の可能性がある。ただし、残り二例は「玉箱持 寸頓」(一例)、「されども御頭は、證據に立べい程に首とつたも同前だ、といはれた程に、それを證據にするであらう。」「七五頁」)、「馬取 孫八」(「水早くつて海際まで流されたところで、人も畜生もすんでにつつきたばらつとした。」「一四頁」)であり、金田(一九七九)のいうように、「日常談話語をもって雑兵たち

のことはをつつし綴ろうとした筆者の意図には限度―それは筆者側ばかりでなく、この読み手側からの制約をも含めて―のあることを物語って」いる箇所だといえる。

しかしこうした例は少ないので、ベシ七例、ウ六例を除外し、ベイ全一八四例を対象に記述する。

なお、『雑兵物語』の否定推量表現にはマイ(「まい／まひ」)が二二例あるが、すべて位相的な偏りなく使われている。「なかるべい」「ないだんべい」などのように、否定と推量とが分析的に表される例は全くみられない。

- (1) その上、此鉄炮はじき被成て、請取申た時、小鉄炮を腰にひつばさむ様にはやく背中へひつ付られまいと思ふ。
「四九頁」

三・二・ベイの生起する環境

『雑兵物語』のベイが生起する環境は、以下の(a)―(f)のようにならめられる。

(a) 文タイプ

平叙文・疑問文と共に

(b) 活用

終止形、連体形ともに「ベイ」で語形変化なし

(c) 前接要素

動詞(力変一例、サ変一〇例、その他二二六例)

助動詞 受身・使役形式「る・らる」「す・さす」一七例

アスペクト・テンス形式「たる・たん」九例

形容詞一八例

名詞述語一三例

(d) 後接要素

主節未では終助詞「ぞ」、「な」、「か」、「までよ」が後接可能

否定形式、過去形式、「う」などのモダリティ助動詞は後接しない

(e) 従属節内

時間節(「時・時には・時は」一四例、「うちは」一例)
仮定・条件節(「ならば／ならば／なら」二九例)

原因・理由節(「程に」九例、「に」六例、「所で」五例)
逆接・譲歩節(「が／か」一〇例、「けれども」一例、「とも」二例)

(f) ベイの接続

動詞・助動詞

未然形・力変動詞

未然・連用同形・サ変動詞、一・二段動詞、受身・使役形式

役形式

終止形・サ変動詞

終止・連体同形・四段動詞、二段動詞、アスペクト・

テンス形式、名詞述語を構成する「たん」

形容詞

全てカリ活用連体形

ベイの語形変化はなく、(b)で挙げたように文が終止する場合の形と名詞に係る形(連体形)が同形であり、形態的な区別はない。語形変化がない点は現代方言と同じだが、連体法、準体法がある点は大きく異なっている。

- (2) とにかくに、陣中饑饉はだと思て、くらわれべい草木の實は云にや及ばない、根葉に至るまで馬にひつ付る。『七九頁』

- (3) 吾人もきりつけず命斗捨べいは臆病だぞ。『六八頁』

- (4) 〈略〉焼残りの紙が風に吹ちつたんべいならば、尊勝何某殿の番所の屏風だと云われべいは、無念なこんたん

べいと思ふ。『一〇三頁』

- (5) 敵にあつて死ぬべいは望む所だが、敵にもあわないで、飯米にひつゝまつて饑へ死ぬべい程に、薦被のうつくたばつたと同じこんだんべい。『八三頁』

ベイが連体法、準体法を持つ点と、(e)に挙げたように時間節や仮定・条件節といった幅広い従属節に生起する点は、上代・中古のベシと共通している。

- (6) 御侍衆の手明の人があんべいならば、御指図を請て、今一張の御弓一腰の御矢を渡すべいとおもふが、(以下略)『五三頁』

現代の諸方言のベイをみると、連体法や準体法はなく、時間節や仮定・条件節内には生起しない。つまり構文的には『雑兵物語』

のベイはかなり上代・中古のベシに近いことがわかる。

しかし主節未用法のベイについて(d)の後接要素に注目してみると、終助詞は後接するが否定形式や過去形式、ムやメリ、ナリなどのモダリティ形式が後接しないことから、まずベイの活用が失われて不変化詞となっているために「べからず」「べかりき」のような接続が不可能となっていること、またベイの意味がムやメリなどに並ぶ判断のモダリティ形式となっている可能性のあることが指摘できる。つまり主節末に出現するベイは、現代方言のベイの性格にかなり近いのである。

ベイの接続について(f)を見ると、「落つべい」のように二段活用動詞終止形にベイがつく例が若干ある以外は、一・二段活用動詞と助動詞(受身・使役)には未然・連用形接続であり、四段活用動詞、助動詞(アスペクト・テンス形式の「たる／たん」)には終止・連体形接続である。サ変動詞への接続が未然・連用形接続と終止形接続との間でゆれているが、推量表現や意志表現などの使い分けといった意味的な偏りはない。このことから、サ変動詞への接続にみられるゆれば、ベイが未然・連用形接続から終止形接続へと回帰する過程における過渡的な現象だと考えられる。こうした接続の多様な状況には、動詞の語幹意識の変化や動詞活用の変化、さらに認識系の判断のモダリティ形式が終止形接続に偏っていく変化などが複雑に関わっていると思われる。

三・三・意味面の特徴

『雑兵物語』のベイの意味は、中古資料にみられるベシと同様に、「状況」「可能」といった事態の意味「義務」「適当」などの義務の意味、「必然」「推量」などの認識の意味のどれもが存在する。以下、それぞれについて詳しく見ていく。

三・三・一・事態の意味

現代語でも「べく」の形に限り事態の意味が残っているが、『雑兵物語』ではベイが事態の意味も表している。ただし(8)は可能動詞「抜ける」によって可能の意味が補強されているといえる。

- (7) 〈略〉敵が左からは刺も出^はい^けが、右から馬を入立た所で、刺も飛礫も出^ですべ^い様がなくて騒ぎまわる所を、馬をおつ込むやいなや、一の先の残る人数が横鍵に鍵をはじき初た故に〈以下略〉「一〇四頁」
- (8) 此やうなすぐな刀を具足の上に指^さいては、二尺ばいの刀も抜ないもんだ。おれがかつばさんだ様にさしては五六尺の刀もぬけべいぞ。「五六頁」
- (9) 二人は得^えだ程に、なるべ^いいならば百人でもうつ殺せ。「六八頁」

三・三・二・もし(か)〜ベイ(か)と思う」という表現

古典のなかではベシと「もし」との共起は目新しいものではないが、『雑兵物語』では「もし」や「もしか」がベイと共に起し、「も

し(か)〜ベイ(か)と思う」といったパターンでよく用いられている。山口(二〇〇c)によると、「もしか」は室町期の抄物に見るのがその早い例といい、推量と共に起した例が挙げられている。

- (10) 遅ク来ル故人カナ。サレドモ、若力故人ノ来リモセント思テ、コラヘテ天下ノ酒ヲ半甕ホド貯タゾ。(山口二〇〇cの用例²¹⁾。中華若木詩抄・八四)

この『中華若木詩抄』の例も、ベイではなくム系のンであるという違いこそあれ、『雑兵物語』の「もし(か)〜ベイ(か)と思う」形式の特徴と通じている。このことは金田(一九七九)と同じく、『雑兵物語』の成立に抄物の影響がある可能性、またムヤンをベイに機械的に置き換えた可能性のあることを意味しているのかもしれない。

ともあれ、「もし(か)〜ベイ(か)と思う」という文型がどのような表現性をもっていたのか、用例からさぐってみよう。

- (11) 此首を寝首かく如に引かひたれど、若目やさめべ^いと思て、馬乗にのつて、左の手で素首を押へ、右の片手で大脇指を抜べ^いく^とすれど〈以下略〉「四〇頁」
- (12) 是は幸なこんだと思つて、左から突べ^いいならば、もしか鍵てつかれべ^いと思ひ、右の方より鍵の柄をおつ取直し、
- (13) 〈以下略〉「四〇頁」
- いや〜此四つ五つの印を方々にひつ付て居るさへ、もしおとすべ^いいかとおもふてあぶな^いに、是より数はいら

ないもんだ。「一〇一頁」

- (14) 具足を着ない處で、懷へ入ては大切な鼻落しやしべいと重て思案をめぐらして、鉄砲の鞘の鑢へ入、その上へ鉄砲をつゝこんだ所で（以下略「八九頁」）

こうしたベイは、先行している副詞「もし」「もしか」や仮定・条件節によってマークされる仮定的文脈のなかで、ベイでマークされた当該の事態が起こる可能性のあること、言い換えるとベイでマークしていることがらは未実現事態だということを表していると思われる。一般的に仮定・条件節と推量形式は、推量形式が話し手の判断を含むものであるため共起しないが、『雑兵物語』のベイはそうした判断に重きを置くのではなく、マークした事態が現実ではない（未だ実現されていない）ことを表す形式であったといえるのではないだろうか。

ただし現代の方言のベイでは、管見の限り、副詞「もし」や仮定・条件節で用いられるものはなく、『雑兵物語』に見られたこのベイの用法はその後維持されることはなかったと言えそうである。

なお、『雑兵物語』の用例は、当該の事態が生じることが好ましくない、できれば起こってほしくない文脈ばかりでこの文型が用いられているため、「もし（か）」「ベイ（か）」と思うに当該の事態が起こるのを危惧している、といったニュアンスが感じられるが、こうしたマイナス評価への偏りはむしろ戦の心得書という資料の性格に起因するものだと考えられる。

三・三・三「すでにベイとした」という表現

『雑兵物語』では、現代標準語の「しそうになる」「もう少して」～「するところだった」などに解釈できる文脈で、「すでにベイとした」というパターンがよく見られる。副詞「既に（すでに・すでに）」は、現代語でも「すんでのところでした」という成句で未然を表しているが、『雑兵物語』では同様の意味の成句の中にベイが現れるのである。

- (15) 返すくも銀袴の賢輪一つで既に命を失ふべしとした。
「四一頁」

- (16) その中でも、制札の鞘をせおつた鑢担がおかしいことだ。腸が切べしとした。「四四頁」

- (17) 馬兵衛めは山城にこもり申た。猶以水につまつて、既に喉が干つて死べしと仕たと語り申た。「八一頁」

これらの例から、金田（一九七九）のいう文語と口語の置き換えがベシとベイとの間だけでなくとベイの間にもなされたこととみることができ、むしろベイに受け継がれた未実現事態のマークとしての性格が、共起する特定の形式「既に」の力を借りた場合にのみ強く出てきたものと考えるのが妥当ではないだろうか。

この「すでにベイとした」も、「既に」という限られた副詞と共起するだけの成句的なものとなっており、非生産的である。方言でもこうしたベイの用法はなく、『雑兵物語』に特徴的なこの用法はその後衰退の途を辿ったと考えられる。

三、三、四、義務の意味

『雑兵物語』のベイにもベシが持つような義務の意味が確認できる。以下の(18)のように、ベイは話し手だけに関与する事象(ここでは自分の持ち物である脇差)についての話し手の意志(「折釘を打つ」という事態実現の意志)を表出を表しているが、あるいはその行為が適当であることを表している。

- (18) 〈この自分の持つている脇差に〉さか角が有べいならば、帯に引かゝつてはやくぬけべいものと思へば、今から此鞘に折釘でも打べいか。「四一頁」

以下の(19)(20)のような場合は、弥助という登場人物が傷を負った加助を介抱しながら語る部分であり、動作の主体は弥助、受け手は加助だということが明確であるため、意志表現(申し出の用法)といふことができるだろう。

- (19) 〈弥助が加助に対して〉その柿染の物をひつぱいで、おらが上張を着せべいぞ。「九一頁」

- (20) 〈弥助が加助を介抱しながら〉ねむる事をがいに忌むぞ。ねむるべいならば、紙縫を以て鼻の真先をなでべいぞ。

「九五頁」

しかし、多くは以下の例のように、話し手が誰に対して話しているのか、また動作主体に話し手が含まれているかどうかかわからない、適当とも意志とも解釈できるものである。『雑兵物語』が啓蒙書の性格を持つため、書き手は登場人物の独り言のかたちをとることによって、読み手が登場人物に自己同一視して読み進

めることを効果的に利用して啓蒙を行っているといえよう。

- (21) 今日(けふ)は川越(かわごへ)が有べいに、胸乱(むねご)を首に付べい。「三三頁」
事態についての価値的な判断を含む当為の意味に解釈できるベ
イは、多くが「ゝものだ／もんだ」「ゝ事だ」などが後接した形
式を取っている。

- (22) 此事(このこと)を思へば、陣中(じんちゅう)へは蒼毛馬(そうもうま)を引べいものだぞ。「九七頁」

- (23) 見失(みし)なわぬ様(よう)にして馬(うま)を早くひつけて乗せべいぞ。能々(なんざ)心にかけべいこんだ。「一〇〇頁」

「ゝものだ／もんだ」や「ゝ事だ」が共起しないベイも義務や適当の意味だと解釈することは可能だが、ベイは特に終止法である場合、動作主の人称が文脈に埋没していると、次に示す例のように意志・勧誘・命令などの区別がはっきりとつけられない。つまり『雑兵物語』のベイは、単独では義務や適当の意味も意志・勧誘・命令の意味も全て表してしまうが、「ゝものだ／もんだ」や「ゝ事だ」と共に用いることによって当為の意味を限定的に表す傾向があるといえる。

- (24) 押前(おしまへ)はしづかな時は請筒(こま)がよい。がいにはやい時は柄立(えだて)革(かわ)へつこんで持(も)が勝手(かたへ)によひ。もつとはやくなつたらば、旗(はた)をひんまいてひつかづくべい。「四八頁」

- (25) 味方(みかた)地(ぢ)を掘(ほ)りたらば、来年(らいねん)の田作(でんさく)がちがうべい程(ほど)に、必(かならず)ほらない物(もの)だぞ。敵地(てきぢ)ならば、見付次第(みづきしだい)ほちくるべいぞ。「九七頁」

三・三・五 認識の意味

『雑兵物語』における、いわゆる推量と解釈できるペイは以下のようなものである。

(26) もはや寒い時分だ程に今こい。〔九〇頁〕

(27) がいに手間を取べい所で、難儀をしべい。〔四九頁〕

当為や将然の場合と異なり、推量の意味は意志・勧誘・命令の場合と同様、特に弁別的な形式が共起するわけではないため、これらの意味を見分けるには人称情報と文脈が不可欠である。しかしこのことは逆に言えば、これらの意味があるひとまとまりのものとして捉えられていたことの証拠とも言える。モダリティに多くの迂言的形式が存在し、それを一対一対応しているかのように使い分けている現代日本語の視点からすれば『雑兵物語』のペイは文脈依存的だが、ペイの様々な意味の中から当為などが別形式とセットにされることによって離れていき、ペイ本体には「未実現」といった意味が残されはじめた段階と見ることができらるう。

なお、『雑兵物語』は一段を一人の登場人物が語るかたちで物語が進行する作品であるため、いわゆる確認要求用法は推量用法と判別しにくい場合が多い。しかし、段の中で語り手が交代することがあり、次の(28)のように、話し手が自分の持っている確定情報に基づいて判断した内容に關し、聞き手にその確認を求めていることが明らかな例がある。これらから、『雑兵物語』のペイにも確認要求用法があるといえよう。

(28)

〔略〕おれが旦那は二番鍵だ所へ、加助が旦那の一番鍵をぶつこみ被成るも、加助が鍵脇をおつつむるをも、能見とゞけたが、切く、主も披官も比類ない手柄をしなさつた。それにつゞいておれが旦那だんべい。むかしから三番鍵と云事はないが道理だ。〔八六頁〕

四. まとめ

『雑兵物語』で用いられているペイには、次のような特徴がみられた。

まず、接続面では、前節要素によつて未然・連用形接続と終止・連体形接続とにわかれているが、前節要素の活用形による推量や意志などの意味的な使い分けはなく、これは動詞の語幹認識や動詞活用認識の推移、さらに認識系の判断のモダリティ形式が終止形接続に偏つていく変化などを反映したものだと考えられる。また、ペイの生起する位置は、連体節（提題の「は」を含む）、時間節（トキ）、原因・理由節（ホドニ）、仮定節（ナラバ）、逆接節（ガ）、引用節および主節末とかなり広く、上代・中古のベシと共通している。しかし主節末のペイの後接要素を見ると、否定形式や過去形式、ムなどのモダリティ助動詞は後接しない。この点には現代諸方言のペイに近い性格が観察できる。ペイが不変化詞となっていることにも、現代諸方言に通じるものがある。意味の面では、事態の意味、義務の意味、認識の意味のどれをも持っているが、『雑兵物語』のペイの事態の意味や義務の意味

の一部は限られた形式と共起することで特化しており、かなり成句的になっている。つまり『雑兵物語』のベイは接続や構文的な面だけでなく意味の面においても、事態の意味を持つ上代・中古のベシと事態の意味を持たない現在の諸方言のベイとの中間的な位置にあると言えるが、未実現事態のマーカーである点でつながりつつも、事態の意味や義務の意味を表す際には他形式による補強が必要となっていた点で、ベイの事態の意味・義務の意味が弱まりつつあったといえるだろう。

【注】

- (1) 近畿方言では、老年層において「行くつもりだったのに行かなかった」に相当する意味で「行くべしやつたのに、行かんかった」のようにベシを使用することがあったという(中井一九九七の三六頁、船木一九九九)。ただし、このベシは関東以北方言のベイ形式と出自が同じか証明できていない。管見の限りでは近世の上方口語資料にこの用法のベシは確認できず、近代以降に文章語などの文体から取り込んだものである可能性もあるので検討が必要である。

- (2) 弘化三年版本を底本とした深井(一九七三)でもベイは二八四例あるが、用例は一部異なっている。またベシの例は弘化三年本の場合四例と若干少ない。

- (3) 内閣文庫蔵浅草文庫旧蔵本を含む写本のいくつかは、下巻三八丁以降の馬取の孫八と彦八のやりとりのうち、「又」

以降の部分については文法的特徴から後世の追補であることが明らかにされている(金田一九七二)。しかし、ベイに関わる承接関係や意味・用法に関しては補筆部分とそうでない部分とで差がみられないため、本稿では全てのテキストを調査の対象とした。

- (4) 『雑兵物語』には否定意志表現や否定勧誘表現をマイあるいは否定形式とベイによって表している箇所がなく、意志系の表現におけるマイやベイの使用状況は明らかにできない。

- (5) ただし、モノヲ、モノダ、モンダ、事ダ、コンダ、ヤウモナイ、ヤウガナイなどは、意味・用法としては終助詞的なものといえるが、ここではベイの後接要素からベイの構文的ふるまいを観察することが目的なので、モノ、コト、ヤウなどを形式名詞とみなし、一語化して用法が限定された終助詞的なものとしては扱っていない。

- (6) 漢字に振り仮名がないため前接要素の活用形がわからないものも多いため、全ての用例数を列挙することはしない。

【参考文献】

- 大鹿薫久(一九九九)「べし」の文法的意味について『森重先生喜寿記念 ことばとことのは』和泉書院
金田 弘(一九五六)『雑兵物語に見られる用言をめぐって』国語研究 四

——(一九七二)『雑兵物語 覚書—東国語文献としての性格について—』『國學院雜誌』昭和四十七年 一月

——(一九七九)『助動詞ペイと洞門抄物』『田辺博士古稀記念国語助動詞論叢』桜楓社

川村 大(一九九五)『ベシの諸用法の位置関係』『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院

——(一九九六)『ベシの表す意味—肯定・否定・疑問の文環境の中で—』『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院

——(一九九八)『事態の妥当性を述べるベシをめぐる—』『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院

近藤泰弘(一九九三)『推量表現の変遷』『月刊言語』二二—二

阪倉篤義(一九六九)『べし』『らし』『らむ』『けむ』について

『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』(『論集日本語研究七助動詞』(有精堂)所収)

高松政雄(一九六九)『ペイ致』『国語国文』三八七

高山善行(二〇〇二)『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房

中井幸比古(一九九七)『『府下各地の方言』平山輝男編『日本

物語 おあむ物語 附おきく物語』岩波文庫

中村通夫・湯沢幸吉郎校訂(一九四三)『雑兵物語 おあむ物語 附おきく物語』岩波文庫

橋本四郎(一九五五)『ベシ・マジの接続面の混乱』『国語学』二

深井一郎編(一九七三)『雑兵物語研究と総索引』武蔵野書院

船木礼子(一九九九)『意志・推量形式「ペー」の対照—用法変化の推論—』『待兼山論叢』三三三

山内洋一郎(一九八九)『中世語論考』清文堂出版

山口堯二(一九九一)『推量体系の史的変容』『国語学』一六五

——(二〇〇〇a)『中世末期口語における「べし」の後身—』『天草版平家物語』の訳語による—』『仏教大学文学部論集』

——(二〇〇〇b)『べし』の通時的変化』『京都語文』六

——(二〇〇〇c)『副詞「もし」の通時的変化とその周辺—』『京都語文』六

——(二〇〇三)『助動詞史を探る』和泉書院

【付記】本稿は橋本(船木)礼子が大阪大学に二〇〇四年九月に提出した博士論文の第七章第二節を大幅に改稿したものである。